2022年度豊橋技術科学大学卒業予定者・修了予定者アンケート調査結果分析

１．卒業予定者・修了予定者アンケート調査方法，回収状況等について

「豊橋技術科学大学卒業（修了）予定者，卒業（修了）生及び就職先アンケートの実施に係る方針」第２に基づき，2018年度から調査項目等を全面的に見直し，卒業予定者・修了予定者に対し、豊橋技術科学大学卒業生・修了生の教育成果等に関するアンケート調査を毎年度実施している（2018年度から変更なし）。

（卒業（修了）予定者アンケート）
第２　卒業（修了）予定者に対して行うアンケートは次により実施する。
対象：アンケート実施年度に卒業（修了）の年次にある者
目的：卒業年次にある者に対して学士課程における学習成果，修了年次にある者に対して大学院専攻における修得すべき知識・能力の修得度合い等について意見を聴取し，もって各教育プログラムの教育効果の検証に資する。
時期：毎年度１月から３月までの間に実施するものとし，アンケート結果の分析は，アンケートを実施した年度の翌年度に行うものとする。

●調査方法に係る課題・改善方策等

（課題・改善方策等）

・紙媒体によるアンケート調査から，教務情報システムによるWebアンケートシステムに変更したが回収率が極端に低下したため、学外からでも回答できるLime Survey Webアンケートシステムに調査方法を変更した結果，2018年度以降は回収率が向上し回収率50%以上を維持している。ただし，Lime Surveyの契約が2022年度末で終了したため，2023年度以降はGoogleフォームによるWebアンケートシステムで実施している。

・単年度毎の卒業・修了予定者アンケート結果に基づいた対応については，各系・総合教育院及び事務局各課からの対応内容を確認する仕組みを 2022 年度アンケート実施分から確立している。ただし，中長期的に対応する必要がある改善等の改善方策及び改善計画の策定等については，明確に定めていないため，例えば今回のように５年度間のアンケート調査結果をとりまとめ，改善方策，改善計画を策定する必要がある。

・改善方策，改善計画策定の仕組みを，豊橋技術科学大学卒業予定者・修了予定者アンケート等の実施に係る指針等に規定することを検討する。

●回収等に係る課題，改善事項

（2022年度回収状況）

	2022年度卒業（修了）予定者アンケート
調査時期	2023年２月13日～2023年３月23日
調査方法	Webアンケート（Lime Survey（無記名式））
回答数	465（対象者数　877）回収率 53.0%
調査主体	教育戦略本部
集計分析	教育戦略本部

(2022 年度アクセス状況)

	機械工学	電気・電子情報工学	情報・知能工学	応用化学・生命工学	建築・都市システム学	総計
学内	31%	38%	21%	33%	30%	31%
学外	69%	62%	79%	67%	70%	69%

(年度別回収状況 2018 年度～2022 年度)

年度	対象者	回答数	回収率
H30(2018)	899	517	57.5%
R01(2019)	789	465	58.9%
R02(2020)	921	549	59.6%
R03(2021)	896	503	56.1%
R04(2022)	877	465	53.0%

＊2018 年度から，教務情報システムを利用した Web アンケートから LimeSurvey　Web アンケートに変更している。学外からのアンケートへのアクセスを可能としたこと，レスポンシブデザインに対応したことでスマートフォンからの回答を容易にしたことが，回収率回復の大きな要因であると考えられる。

(年度別，課程・専攻別回収状況)

2018 年度

所属	対象者	回答数	回収率
機械工学	272	131	48.2%
電気・電子情報工学	193	119	61.7%
情報・知能工学	187	110	58.8%
環境・生命工学	124	88	71.0%
建築・都市システム学	123	69	56.1%

2019 年度

所属	対象者	回答数	回収率
機械工学	271	155	57.2%
電気・電子情報工学	182	130	71.4%
情報・知能工学	176	103	58.5%
環境・生命工学	118	69	58.5%
建築・都市システム学	95	58	61.1%

2020 年度

所属	対象者	回答数	回収率
機械工学	277	155	56.0%
電気・電子情報工学	191	122	63.9%

情報･知能工学	203	113	55.7%
応用化学･生命工学	118	75	63.6%
建築･都市システム学	132	84	63.6%

2021 年度

所属	対象者	回答数	回収率
機械工学	277	170	61.4%
電気･電子情報工学	187	104	55.6%
情報･知能工学	201	98	48.8%
応用化学･生命工学	110	62	56.4%
建築･都市システム学	121	69	57.0%

2022 年度

所属	対象者	回答数	回収率
機械工学	259	147	56.8%
電気･電子情報工学	190	105	55.3%
情報･知能工学	199	90	45.2%
応用化学･生命工学	102	60	58.8%
建築･都市システム学	127	63	49.6%

（課題及び改善事項）

2022 年度の回収率 53%は，2018 年度から 2021 年度の過去 4 年度間の平均回収率の約 58%を下回っている。応用化学・生命工学以外は、平均回収率を下回っていることから，50%未満の回収率であった情報・知能工学を含め，回答数を増加させるための周知等を徹底して行う必要がある。

２．卒業（修了）予定者アンケート調査結果分析

以下の各設問（問 1 は除く）について，学部及び博士前期課程毎，設問毎に 2018 年度からの調査結果と比較して検証する（博士後期課程は少人数のため除く）。前回調査「―継続的な改善活動のために－2018 卒業（修了）予定者アンケート調査結果分析」を参考にして分析結果をとりまとめる。

（１）学位授与方針に掲げる知識と能力の必要性，知識と能力の身につけ度合いの評価（問２）

本学の教育プログラムを受けた卒業・修了予定者に，豊橋技術科学大学の学位授与の方針に掲げる「知識と能力の身につけ度合い」を確認している。卒業・修了者，修了者が就職した企業にも，同じ項目を用いたアンケート調査を実施している。「2018 就職企業先及び卒業生及び修了生（社会人）アンケート調査結果分析」も踏まえ，卒業（修了）時の自己評価，社会人としての経験を踏まえての自己評価及び就職企業先による第三者(外部)評価を比較することで，学修成果の達成度合いを評価・検証する。

「とてもよく身についた」,「よく身についた」≒「積極的に(自信を持って)身についた自己評価」として評価する。

自己評価と第三者評価の比較において，乖離が少ない場合は，毎年度実施する本アンケート結

果が実態を反映したものとして評価する。

問２．学位授与の方針に掲げる知識と能力の修得度合いについて

問２－１．本学で受けた教育により，以下の学位授与方針に揚げる知識と能力についてどの程度身につきましたか。（とてもよく身についた　よく身についた　身についた　最低限は身についた）

「とてもよく身についた」及び「身についた」割合の合計の平均

2022 年度調査				2018 年度調査			
DP	学部	大学院	全学	DP	学部	大学院	全学
A	59.7%	59.2%	59.4%	A	48.7%	50.2%	49.5%
B	58.1%	66.4%	62.2%	B	52.2%	60.1%	56.2%
C	64.4%	69.5%	67.0%	C	60.8%	63.8%	62.3%
D	61.1%	69.9%	65.5%	D	58.2%	67.3%	62.8%

［分析結果］

2018 年度から年度毎により若干の増減はあるものの，「とてもよく身についた」及び「よく身についた」割合の合計の全学平均値は，全ての項目で前回 2018 年度調査を上回っている。DP・A「地球的な視点から多面的に物事をとらえるグローバルな感性を持ち，人間と自然との共生について考える広い教養を身につけている」については，2018 年度は約 50%であったが，2022 年度は約 60%になるなど，身についたと自覚する学生が多くなったことが確認できる。

SGU 事業採択当初から、早期にグローバル化教育を全学的に展開することを念頭に，全学グローバル化教育改革を断行し，高度グローバル力を駆使できる技術者を養成するため、グローバル化教育の観点から教育カリキュラム編成、時間割等を全面的に見直し、学部・大学院一貫によるリベラルアーツ教育、語学教育を強化・充実したこと，令和２年度から社会科学分野に社会学の学問分野を設け授業科目を新設したこと，適切な授業科目を選択する事を可能にするナンバリングの導入により，学問分野を新たに設定したことなど，学部・大学院一貫教育によるリベラルアーツ教育を充実するための取り組みを継続した教育成果・効果によるものと考えられる。

DP 全学平均値の割合は，「C>D>B>A，大学院修了時＞学部卒業時」であり，学部卒業時より大学院修了時の方が高い傾向は 2018 年度と変わらない。

［2022 年度大学院修了生，就職企業先アンケートとの比較］

2022 年度大学院修了生の教育成果等に関するアンケート調査結果分析，問 3-1「学位授与方針に掲げる知識と能力の身につけた度合い」を問う同じアンケート項目においても，「よく身についた」，「身についた」の割合の合計は、全ての項目で前回 2018 年度調査を上回っており、B、C 及びD については、いずれも 85%を超えている（A：47.1%→61.5%、B：83.3%→87.0%、C：76.5%→88.8%、D：75.5%→85.8%）。

また，問 3-2「学位授与方針に掲げる知識と能力は実社会においてどの程度役立っているか」を問うアンケート項目においても，実社会において役立っていると認識する割合が高いことから，本アンケート調査結果は実態を反映したものであると判断できる。

2022 年度就職企業先アンケート（豊橋技術科学大学卒業生・修了生の教育成果等に関するアンケート）調査結果分析，問５－２「学位授与方針に掲げる知識と能力」を本学卒業生，修了生はどの程度身につけているかを問う同じアンケート項目においても，「良く身につい

ている」,「身についている」の割合の合計は，全ての項目で 2018 年度調査より高く，全ての項目で 90%を超えている。

大学院修了生，就職企業先アンケート調査結果分析においても，同じような結果であり，実社会において役立っていると認識する割合が高いことから，本アンケート調査結果は実態を反映したものであると判断できる。

※問 02：2022 卒業予定者・大学院修了予定者アンケート調査結果分析（DP 大学全体）

（2）教育プログラムの満足度及び水準に関する評価（問３－１、問３－２）

「満足している」,「どちらかというと満足している」≒「積極的に(自信を持って)満足している自己評価」として評価する。

問３－１．あなたの履修した課程・コース等の教育プログラム全体の満足度について教えてください。(満足している　どちらかというと満足している　あまり満足していない　満足していない)

「満足している」及び「どちらかというと満足している」割合の合計の平均

「あまり満足していない」及び「満足していない」割合の合計の平均

	2022 年度調査			2018 年度調査		
	学部	大学院	全学	学部	大学院	全学
満足している	36.2%	43.9%	39.5%	31.9%	38.7%	35.0%
どちらかというと満足している	57.7%	50.9%	54.8%	56.7%	47.6%	52.9%
あまり満足していない	5.9%	3.6%	4.9%	8.9%	9.7%	9.1%
満足していない	0.2%	1.5%	0.8%	2.5%	3.9%	2.9%
満足している, どちらかというと満足しているの割合	93.9%	94.9%	94.3%	88.6%	86.4%	87.9%
あまり満足していない、満足していないの割合	6.1%	5.1%	5.7%	11.4%	13.6%	12.1%

［分析結果］

2022 年度の「満足している」及び「どちらかというと満足している」割合の合計の平均は、学部 93.9%、大学院 94.9%、全学 94.3%であり、大きく変わっていない。2018 年度から年度毎に若干の増減はあるものの,「満足している」及び「どちらかというと満足している」割合は年々向上している。「あまり満足していない」及び「満足していない」割合の合計は、2022 年度は 5.7%と 2018 年度 12.1%を大きく下回っており満足度が底上げされている。学部及び大学院とも同じような割合であり満足度が高くなっている。

問３－２．あなたの履修した教育プログラムの水準について教えてください。(非常に難しかった　難しかった　易しかった　非常に易しかった)

「非常に難しかった」及び「難しかった」割合の合計の平均

「易しかった」及び「非常に易しかった」割合の合計の平均

	2022 年度調査			2018 年度調査		
	学部	大学院	全学	学部	大学院	全学
非常に難しかった	6.7%	6.4%	6.3%	7.0%	6.7%	6.9%
難しかった	74.1%	66.0%	70.6%	72.6%	57.3%	66.7%
易しかった	16.9%	28.7%	22.1%	18.7%	32.4%	24.0%
非常に易しかった	1.6%	0.5%	1.1%	1.7%	3.5%	2.3%
非常に難しかった, 難しかったの割合	80.8%	72.4%	76.8%	79.7%	64.1%	73.7%

易しかった，非常に易しかったの割合	18.5%	29.1%	23.2%	20.3%	36.0%	26.3%

［分析結果］

2022 年度の「非常に難しかった」及び「難しかった」割合の合計の平均は、学部 80.8%、大学院 72.4%、全学 76.8%であり、2018 年度から年度毎に若干の増減はあるものの，「非常に難しかった」、「難しかった」割合の合計の平均は、2018 年度と比較すると大きく変わっていない。

学部＞大学院の傾向は変わらないが、大学院については 2018 年度 64.1%から年々割合が上昇し、72.4%と 70%を超え学部との差が縮まっている。「非常に難しかった」、「難しかった」の水準が高くなり、満足度の割合が底上げされ高い割合を維持していることから、教育プログラムの水準は適切に維持されている。

※問 03：2022 卒業予定者・大学院修了予定者アンケート調査結果分析（教育 P 満足度等大学全体）

（３）高専教育との接続性の評価（問４－１）

本学と高等専門学校の授業内容のレベルや違いを確認するため，各課程のコアとなる科目について，授業内容，難易度，質について高専シラバスとの接続性の確認を 2020 年度から開始し、課程毎に毎年度異なる高専を複数抽出して，科目のレベル，科目の重複具合を確認し接続性を評価している。「本学と高等専門学校の授業内容のレベルや違い，授業内容，難易度，質」等の各課程の分析結果も活用し，2020 年度から 2022 年度調査結果と 2018 年度調査結果を比較して評価・検証する（別添資料参照）。

問４－１．以下の分野の科目について振り返っていただき，4 つの観点においてそれぞれ該当するものをお選びください。

①本学で新しい内容を学びましたか（大いに学んだ　少し学んだ　全く学ばなかった　高専又は本学で未履修）

②難易度はどうでしたか（本学の方が難易度が高い　本学，高専でほぼ同じ　高専の方が難易度が高い　高専又は本学で未履修）

③質はどうでしたか（本学の方が質が高い　本学，高専でほぼ同じ　高専の方が質が高い　高専又は本学で未履修）

④同じテーマの科目を受講して理解は深まりましたか（理解が深まった　どちらかといえば理解が深まった　理解が深まらなかった　高専又は本学で未履修）

［分析結果］

2020 年度から開始した高専シラバスとの接続性の検証により、高専教育との接続性の見直しが図られており、本学カリキュラムに反映されている。本取組により教育プログラムの満足度や水準が向上していると考えられるが、2020 年度から開始したため、継続した調査が必要と考える。各課程の分析結果については以下のとおり。

機械工学課程

高専教育と接続する科目を 13 科目から 11 科目に見直している。

・4-1-①：新しい学びに関する比較検証

➢「大いに学んだ，少し学んだ」の割合が高い科目数は増えている。

➢「大いに学んだ」の割合が高い科目数は増えている。

➢「大いに学んだ」の割合が「少し学んだ」の割合を超える科目数は増えている。

➢機械工学系による新しい学びに関する検証

各科目とも学んだ割合は総じて高い。履修なしの割合増加については、理由がわからず

数値だけで議論するのは困難で、高専での状況やGPA評価の影響など複合的に検討する必要がある。

・4-1-②：難易度に関する比較検証

➢「本学の方が難易度が高い」の割合が高い科目数はほぼ同じである。

➢「本学，高専でほぼ同じ」の割合が高い科目数はほぼ同じである。

➢「本学の方が難易度が高い」の割合が「本学，高専でほぼ同じ」の割合を超える科目数（50%以上）はほぼ同じである。

➢機械工学系による難易度の検証

4-1-①、4-1-②の履修していない割合が異なる場合がある。高専より難易度が高い科目や、専門性が高い科目には，履修割合が低下する傾向が見られる。

・4-1-③：質に関する比較検証

➢「本学の方が質が高い」の割合が高い科目数はほぼ同じである。

➢「本学，高専でほぼ同じ」の割合が高い科目数（50%以上）はほぼ同じである。

➢「本学の方が質が高い」の割合が「本学，高専でほぼ同じ」の割合を超える科目数は増えている。

➢機械工学系による質に関する検証

4-1-①、4-1-②及び4-1-③について、履修していない割合が異なる場合がある。

・4-1-④：同じテーマの科目を受講して理解が深まったかに関する比較検証

➢「理解が深まった，どちらかといえば理解が深まった」の割合が高い科目数は増えている。

➢「理解が深まった」の割合が高い科目数はほぼ同じである。

➢「理解が深まった」の割合が「どちらかといえば理解が深まった」の割合を超える科目数は増えている。

➢機械工学系による同じテーマの科目を受講して理解が深まったかに関する検証

回答数やコロナ禍以降のより長い傾向を見ることが望まれる。

・科目のレベル，科目の重複具合の確認よる接続性を評価

教育戦略本部会議（2024.2.11）で，改善の必要が特にないことを確認した。「構造材料学」については，高専または本学で履修していない割合が高くなっていることから，今後，高専科目との接続性を確認する必要はないことを確認した。

電気・電子情報工学課程

高専教育と接続する科目を10科目から9科目に見直している。

・4-1-①：新しい学びに関する比較検証

➢「大いに学んだ」，「少し学んだ」の割合が高い科目数は増えている。

➢「大いに学んだ」の割合が高い科目数は増えている。

➢「大いに学んだ」の割合が「少し学んだ」の割合を超える科目数はほぼ同じ。

➢電気・電子情報工学系による新しい学びに関する検証

ほとんどすべての科目で大いに学んだおよび少し学んだが90%を超えている。

・4-1-②：難易度に関する比較検証

➢「本学の方が難易度が高い」の割合が高い科目数は増えている。

➢「本学，高専でほぼ同じ」の割合の科目数（50%以上）は減っている。

➢「本学の方が難易度が高い」の割合が「本学，高専でほぼ同じ」の割合を超える科目数は，全ての科目が超えておりほぼ同じである。

➢電気・電子情報工学系による難易度の検証
ほとんどすべての科目で高専の方がレベルが高いと感じているのは 10%以下である。

・4-1-③：質に関する比較検証

➢「本学の方が質が高い」の割合が高い科目数は増えている。
➢「本学，高専でほぼ同じ」の割合の科目数（50%以上）はほぼ同じである。
➢「本学の方が質が高い」の割合が「本学，高専でほぼ同じ」の割合を超える科目数はほぼ同じである。
➢電気・電子情報工学系による質に関する検証
電気回路論、解析電磁気学、数値解析で高専の方が質が高いが 10%を超えている。ただし、年々改善されている。

・4-1-④：同じテーマの科目を受講して理解が深まったかに関する比較検証

➢「理解が深まった，どちらかといえば理解が深まった」の割合が高い科目数は増えている。
➢「理解が深まった」の割合が高い科目数（50%以上）はほぼ同じである。
➢「理解が深まった」の割合が「どちらかといえば理解が深まった」の割合を超える科目数は減っている。
➢電気・電子情報工学系による同じテーマの科目を受講して理解が深まったかに関する検証
2021 年度については、論理回路、解析電磁気学、無機化学、数値解析で理解が深まらなかった割合が 10%を超えている。特定の年だけかどうか今後注視する必要がある。

・科目のレベル，科目の重複具合の確認よる接続性を評価

教育戦略本部会議（2024.2.11）で，改善の必要が特にないことを確認した。

情報・知能工学課程

高専教育と接続する科目を 11 科目としている。

・4-1-①：新しい学びに関する比較検証

➢「大いに学んだ，少し学んだ」の割合が高い科目数は増えている。
➢「大いに学んだ」の割合が高い科目数は増えている。
➢「大いに学んだ」の割合が「少し学んだ」の割合を超える科目数はほぼ同じである。
➢情報・知能工学系による新しい学びに関する検証
どの科目も本学で新たな内容を学んでいると判断できる。

・4-1-②：難易度に関する比較検証

➢「本学の方が難易度が高い」の割合が高い科目数は増えている。
➢「本学，高専でほぼ同じ」の割合が高い科目数（50%以上）はほぼ同じである。
➢「本学の方が難易度が高い」の割合が「本学，高専でほぼ同じ」の割合を超える科目数は減っている。
➢情報・知能工学系による難易度の検証
難易度に関しても本学での科目は妥当なものと判断できる。

・4-1-③：質に関する比較検証

➢「本学の方が質が高い」の割合が高い科目数はほぼ同じである。
➢「本学，高専でほぼ同じ」の割合が高い科目数（50%以上）はほぼ同じである。
➢「本学の方が質が高い」の割合が「本学，高専でほぼ同じ」の割合を超える科目数は減っている。

➢情報・知能工学系による質に関する検証
質に関しても 50%程度は本学の質が高い、25%程度は同程度と評価している。

・4-1-④：同じテーマの科目を受講して理解が深まったかに関する比較検証

➢「理解が深まった，どちらかといえば理解が深まった」の割合が高い科目数は増えている。
➢「理解が深まった」の割合が高い科目数（50%以上）はほぼ同じである。
➢「理解が深まった」の割合が「どちらかといえば理解が深まった」の割合を超える科目数は減っている。
➢情報・知能工学系による同じテーマの科目を受講して理解が深まったかに関する検証
同じテーマの科目を受講して、多くは理解が深まったと回答している。

・科目のレベル，科目の重複具合の確認よる接続性を評価

教育戦略本部会議（2024.2.11）で，改善の必要が特にないことを確認した。

応用化学・生命工学課程

高専教育と接続する科目を 10 科目から８科目に見直している。

・4-1-①：新しい学びに関する比較検証

➢「大いに学んだ，少し学んだ」の割合が高い科目数は増えている。
➢「大いに学んだ」の割合が高い科目数は増えている。
➢「大いに学んだ」の割合が「少し学んだ」の割合を超える科目数は増えている。
➢応用化学・生命工学系による新しい学びに関する検証
「大いに学んだ」、「少し学んだ」の割合が高く、接続性は適当と考える。

・4-1-②：難易度に関する比較検証

➢「本学の方が難易度が高い」の割合が高い科目数はほぼ同じである。
➢「本学，高専でほぼ同じ」の割合が高い科目数（50%以上）は増えている。
➢「本学の方が難易度が高い」の割合が「本学，高専でほぼ同じ」の割合を超える科目数はほぼ同じである。
➢応用化学・生命工学系による難易度の検証
これらは編入学直後に開講している科目であることを考慮すると、適性な範囲であると思われる。

・4-1-③：質に関する比較検証

➢「本学の方が質が高い」の割合が高い科目数はほぼ同じである。
➢「本学，高専でほぼ同じ」の割合が高い科目数（50%以上）は増えている。
➢「本学の方が質が高い」の割合が「本学，高専でほぼ同じ」の割合を超える科目数はほぼ同じである。
➢応用化学・生命工学系による質に関する検証
これらは編入学直後に開講している科目であることを考慮すると、適性な範囲であると思われる。

・4-1-④：同じテーマの科目を受講して理解が深まったかに関する比較検証

➢「理解が深まった，どちらかといえば理解が深まった」の割合が高い科目数は増えている。
➢「理解が深まった」の割合が高い科目数（50%以上）は増えている。
➢「理解が深まった」の割合が「どちらかといえば理解が深まった」の割合を超える科目数はほぼ同じである。

➢応用化学・生命工学系による同じテーマの科目を受講して理解が深まったかに関する検証

「理解が深まった」、「どちらかといえば理解が深まった」の回答が多く、良好であると言える。

・科目のレベル，科目の重複具合の確認よる接続性を評価

教育戦略本部会議（2024.2.11）で，改善の必要が特にないことを確認した。

建築・都市システム学課程

高専教育と接続する科目を 11 科目から 10 科目に見直している。

・4-1-①：新しい学びに関する比較検証

➢「大いに学んだ，少し学んだ」の割合が高い科目数はほぼ同じである。

➢「大いに学んだ」の割合が高い科目数は増えている。

➢「大いに学んだ」の割合が「少し学んだ」の割合を超える科目数は増えている。

➢建築・都市システム学系による新しい学びに関する検証

社会基盤系の科目で評価が低い。ただし、これらの科目は履修していないという回答がおおいため、これを除かなければただしい判断ができない。

・4-1-②：難易度に関する比較検証

➢「本学の方が難易度が高い」の割合が高い科目数は増えている。

➢「本学，高専でほぼ同じ」の割合が高い科目数（50%以上）は減っている。

➢「本学の方が難易度が高い」の割合が「本学，高専でほぼ同じ」の割合を超える科目数は増えている。

➢建築・都市システム学系による難易度の検証

履修していないという回答を除いてみると、本学での難易度は概ね高専よりは難しいと回答されている。

・4-1-③：質に関する比較検証

➢「本学の方が質が高い」の割合が高い科目数は増えている。

➢「本学，高専でほぼ同じ」の割合が高い科目数（50%以上）は減っている。

➢「本学の方が質が高い」の割合が「本学，高専でほぼ同じ」の割合を超える科目数は増えている。

➢建築・都市システム学系による質に関する検証

履修していないという回答を除いてみると、教科間で差がみられる。教科毎の要因があると考えられる。

・4-1-④：同じテーマの科目を受講して理解が深まったかに関する比較検証

➢「理解が深まった，どちらかといえば理解が深まった」の割合が高い科目数はほぼ同じである。

➢「理解が深まった」の割合が高い科目数（50%以上）は増えている。

➢「理解が深まった」の割合が「どちらかといえば理解が深まった」の割合を超える科目数は増えている。

➢建築・都市システム学系による同じテーマの科目を受講して理解が深まったかに関する検証

履修していないという回答を除いてみると、概ね良好な評価である。

・科目のレベル，科目の重複具合の確認よる接続性を評価

教育戦略本部会議（2024.2.11）で，改善の必要が特にないことを確認した。

（4）教養教育における英語教育に関する評価（問５－１）

「身についた」,「どちらかというと身についた」≒「積極的に(自信を持って)身についた自己評価」として評価する。

問５．グローバル化について

問５－１．本学は，教養教育における英語教育の強化を図っています。英語を運用する能力はどの程度身につきましたか。(身についた　どちらかというと身についた　あまり身につかなかった　身につかなかった)

「身についた」及び「どちらかというと身についた」割合の合計の平均

「あまり身につかなかった」及び「身につかなかった」割合の合計の平均

	2022 年度調査			2018 年度調査		
	学部	大学院	全学	学部	大学院	全学
身についた	15.6%	11.8%	14.0%	18.4%	22.2%	19.9%
どちらかというと身についた	44.3%	44.8%	44.5%	39.0%	32.4%	36.4%
あまり身につかなかった	35.1%	36.0%	35.5%	32.3%	33.3%	32.7%
身につかなかった	5.0%	7.4%	6.0%	10.3%	12.1%	11.0%
身についた、どちらかというと身についたの割合	59.9%	56.6%	58.5%	57.4%	54.6%	56.3%
あまり身につかなかった、身につかなかったの割合	40.1%	43.4%	41.5%	42.6%	45.4%	43.7%

【分析結果】

2022 年度の「身についた」及び「どちらかというと身についた」割合の合計の平均は、学部 59.9%、大学院 56.6%、全学 58.5%であり、応用化学・生命工学課程・専攻は 70%を超えているものの、その他の課程・専攻については、学部及び大学院とも 2018 年度調査といずれも同じような割合であり大きく変わっていない。

グローバル化教育の観点から語学教育を強化した教育カリキュラムを編成しているが、学生の英語能力も著しく向上し、卒業・修了まで長期に渡り英語学修を継続する学生が年々増加し、英語運用に対する意識が大きく変化していることから、結果的に 2018 年度と大きく変わっていないのではないかと考える。

「あまり身につかなかった」及び「身につかなかった」割合の合計が半数を超えている年度もあるので，英語運用能力の強化については改めて検討する必要がある。2022 年度大学院修了生（社会人）アンケート問 9-1、問 9-2 においても英語の必要性は大きく、英語運用能力向上の対応を検討する必要があること、英語を実学として学ぶ環境や場を用意しておくことが必要であると分析している。大学院の専門教育の中での英語教育の取組、日本人学生の海外派遣、留学等の教育プログラム、外国人留学生との共修環境をより充実させる必要がある。

以下「2018 年度調査分析結果」

『英語教育については，「身についた」,「どちらかというと身についた」の割合は，学部平均 57.4%，大学院平均 54.64%である。「身につかなかった」の割合は学部平均 10.3%，大学院平均 12.1%である。「身についた」,「どちらかというと身についた」の割合が学部では建築・都市システム学課程が最も高いが，大学院では建築・都市システム学専攻が最も低い。傾向が今回のアンケートでは解らないため，継続した調査を実施する必要がある。2017 年度から開始した SGU 英語カリキュラムでの成果を引き続き計測する必要がある。卒業・修了生アンケ

ート問９－１，９－２においても英語力を身につけておけば良かったという回答が多い。「身についた」,「どちらかというと身についた」割合を平均で 80%以上にする必要があるのではないかと考える。』であった。

※問 05-01：2022 卒業予定者アンケート調査結果分析（英語教育強化）

（５）リベラルアーツ教育に関する評価（問５－２）

「身についた」,「どちらかというと身についた」≒「積極的に(自信を持って)身についた自己評価」として評価する。

問５－２．本学は，自然科学・人文科学・社会科学科目で国際的社会問題への工学的解決策を立案・遂行できるように，カリキュラムを整備し，技術力に加えて幅の広い知識の修得を促進することを考えています。自然科学・人文科学・社会科学科目の教養教育を通して，これらの力はどの程度身につきましたか。(身についた　どちらかというと身についた　あまり身につかなかった　身につかなかった)

「身についた」及び「どちらかというと身についた」割合の合計の平均

「あまり身につかなかった」及び「身につかなかった」割合の合計の平均

	2022 年度調査			2018 年度調査		
	学部	大学院	全学	学部	大学院	全学
身についた	22.9%	18.2%	20.9%	19.4%	23.7%	21.1%
どちらかというと身についた	58.4%	65.0%	61.3%	58.4%	51.7%	55.7%
あまり身につかなかった	17.2%	14.8%	16.1%	16.8%	18.4%	17.4%
身につかなかった	1.5%	2.0%	1.7%	5.5%	6.3%	5.8%
身についた、どちらかというと身についたの割合	81.3%	83.2%	82.2%	77.8%	75.4%	76.8%
あまり身につかなかった、身につかなかったの割合	18.7%	16.8%	17.8%	22.3%	24.7%	23.2%

【分析結果】

2022 年度の「身についた」及び「どちらかというと身についた」割合の合計の平均は、学部 81.3%、大学院 83.2%、全学 82.2%であり、2018 年度から年々向上している。2019 年度から 2022 年度の学部、大学院及び全学の平均も 80%程度であり、リベラルアーツ教育により幅の広い知識の修得を促進できている。学部・大学院一貫によるリベラルアーツ教育、語学教育を強化・充実したこと，令和２年度から社会科学分野に社会学の学問分野を設け授業科目を新設したこと，適切な授業科目を選択する事を可能にするナンバリングの導入により，学問分野を新たに設定したことなど，学部・大学院一貫教育によるリベラルアーツ教育を充実するための取り組みを継続した教育成果・効果によるものと考えられる。

以下「2018 年度調査分析結果」

『リベラルアーツ教育については，「身についた」,「どちらかというと身についた」の割合は，学部平均 77.8%，大学院平均 75.4%であり、８割近い学生から評価を受けている。別の調査である卒業・修了生アンケート問７でも，一般科目はキャリア（仕事）形成に役立っているという回答が寄せられており，経済学，統計学などを在学中に学んでおけば良かったという回答もあった。学部・大学院博士前期課程一貫教育によるリベラルアーツ教育を展開する本学としては，大学院教育の専攻分野における深化を深めるためにも， 今後もリベラルアーツ教育の充実を検討していく。』であった。

※問 05-02：2022 卒業予定者アンケート調査結果分析（リベラルアーツ教育強化）

（6）キャリア教育の必要性に関する評価（問６）

「必要である」,「どちらかというと必要である」≒「積極的に(自信を持って)必要であると自己評価」として評価する。

問６．キャリア教育について

問６－１．本学ではキャリア（仕事）形成について考える授業（キャリア教育）の導入を検討しています。 在学中のキャリア教育の必要性についてお聞かせください。(必要である　どちらかというと必要である　あまり必要でない　必要でない)

「必要である」及び「どちらかというと必要である」割合の合計の平均

「あまり必要でない」及び「必要でない」割合の合計の平均

	2022 年度調査			2018 年度調査		
	学部	大学院	全学	学部	大学院	全学
必要である	51.5%	42.4%	47.5%	53.2%	44.9%	49.9%
どちらかというと必要である	42.4%	46.3%	44.1%	34.8%	32.4%	33.8%
あまり必要でない	4.6%	8.4%	6.2%	7.7%	13.5%	10.1%
必要でない	1.5%	3.0%	2.2%	4.2%	9.2%	6.2%
必要である　どちらかというと必要であるの割合	93.9%	88.7%	91.6%	88.0%	77.3%	83.7%
あまり必要でない　必要でないの割合	6.1%	11.4%	8.4%	11.9%	22.7%	16.3%

【分析結果】

2022 年度の「必要である」及び「どちらかというと必要である」割合の合計の平均は、学部 93.9%、大学院 88.7%、全学 91.6%であり、学部の方が大学院より高い傾向は変わらないが、2018 年度から年々割合は向上しており学部は 90%を超えている。

「産学共創キャリア教育センター」を 2024 年度に設置し、実務訓練前後のキャリア教育を強化し、学部から博士後期課程までの一貫した産学共創キャリア教育体制を整備することとしたため、キャリア教育の必要性を問う本設問は、2023 年度からは実施しないこととした。

以下「2018 年度調査分析結果」

『キャリア教育の必要性については,「必要である」,「どちらかというと必要である」の割合は，学部平均 88%，大学院平均 77.3%であり，「必要である」の割合が,「どちらかというと必要である」の割合を超えている系が学部では４課程，大学院では全ての専攻で超えており，就活に役立つスキルについて考える授業の導入を検討する必要がある。2018 卒業・修了生アンケート問 13 でも同じ設問により必要性を確認しており,「必要である」,「どちらかというと必要である」の割合は 80%と高い。在学中では必要性の認識を感じないかも知れないが，ストレスコントロール力を身につける方が良いのではないかとの回答が多くあり，ストレスコントロール力も含めたキャリア教育の導入を具体的に検討する必要がある。)』であった。

※問 06：2022 卒業予定者アンケート調査結果分析（キャリア教育の必要性）

（7）卒業，修了後の進路に関する評価（問７－１、問７－２）

問７．進路・就職支援について

問７－１．卒業・修了後の進路について教えてください。(就職　学内進学（博士前期課程）　学内進学（博士後期課程）　他大学進学（博士前期課程）　他大学進学（博士後期課程）　その他（　））

	2022 年度調査			2018 年度調査		
	学部	大学院	全学	学部	大学院	全学
就職	24.4%	93.1%	54.4%	16.5%	89.4%	45.6%
進学	72.1%	5.4%	43.0%	81.0%	9.7%	52.4%
内訳学内進学（博士前期課程）	70.2%	2.5%	40.6%			
学内進学（博士後期課程）	0.4%	3.0%	1.5%			
他大学進学（博士前期課程）	1.5%	0.0%	0.9%			
他大学進学（博士前期課程）	0.0%	0.0%	0.0%			
その他	3.4%	1.5%	2.6%	2.6%	1.0%	1.9%

【分析結果】
学部は「進学」の割合が高く、特に学内進学（博士前期課程）が約８割を占める。大学院は「就職」の割合が高い。
＊実態は教育研究関係資料を参照

※問 07-1：2022 卒業予定者アンケート調査結果分析（卒業・修了後の進路）

問７－２．入学時の希望進路について教えてください。（就職　学内進学（博士前期課程）　学内進学（博士後期課程）　他大学進学（博士前期課程）　他大学進学（博士後期課程）　その他（　））

	2022 年度調査			2021 年度調査			2020 年度調査		
	学部	大学院	全学	学部	大学院	全学	学部	大学院	全学
就職	24.4%	93.1%	54.4%	22.8%	68.6%	40.2%	20.5%	86.0%	54.6%
学内進学（博士前期課程）	70.2%	2.5%	40.6%	69.6%	24.1%	52.3%	74.9%	6.6%	39.3%
学内進学（博士後期課程）	0.4%	3.0%	1.5%	1.0%	4.7%	2.4%	0.4%	3.1%	1.8%
他大学進学（博士前期課程）	1.5%	0.0%	0.9%	4.5%	0.5%	3.0%	2.3%	1.4%	1.8%
他大学進学（博士後期課程）	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.3%	0.2%
その他	3.4%	1.5%	2.6%	2.2%	2.1%	2.2%	1.9%	2.4%	2.2%

【分析結果】
学部は「進学」の割合が高く、特に学内進学（博士前期課程）が約７割を占める。大学院は「就職」の割合が高い。

※問 07-2：2022 卒業予定者アンケート調査結果分析（入学時の希望進路）

（８）就職先に関する評価（問７－３）

「希望どおり」,「概ね希望どおり」≒「積極的に(自信を持って)希望どおりであると自己評価」として評価する。

問７－３．希望通りの就職先へ就職することはできましたか。（希望どおり　概ね希望どおり　あまり希望どおりではない　希望どおりではない）

「希望どおり」及び「概ね希望どおり」割合の合計の平均
「あまり希望どおりではない」及び「希望どおりではない」割合の合計の平均

	2022 年度調査	2018 年度調査

	学部	大学院	全学	学部	大学院	全学
希望どおり	50.0%	62.4%	59.3%	56.9%	55.7%	55.9%
概ね希望どおり	40.6%	31.7%	34.0%	33.3%	37.8%	36.9%
あまり希望どおりではない	6.3%	4.8%	5.1%	7.8%	5.4%	5.9%
希望どおりではない	3.1%	1.1%	1.6%	2.0%	1.1%	1.3%
希望どおり、概ね希望どおりの割合	90.6%	94.1%	93.3%	90.2%	93.5%	92.8%
あまり希望どおりではない，希望どおりではないの割合	9.4%	5.9%	6.7%	9.8%	6.5%	7.2%

【分析結果】

2022 年度の「希望どおり」及び「概ね希望どおり」割合の合計の平均は、学部 90.6%、大学院 94.1%、全学 93.3%であり、学部及び大学院とも同じような割合であるが大学院は希望どおりの割合が 60%を超えている。学部は３課程、大学院は５専攻で「希望どおり」の割合が「概ね希望どおり」の割合を超えている。2019 年度から 2022 年度の学部、大学院及び全学の平均も 90%程度であり、極めて高い割合で希望企業へ就職している。

以下「2018 年度調査分析結果」

『就職先については，「希望どおり」，「概ね希望どおり」の割合は，学部平均 90.2%，大学院平均 93.5%であり，「希望どおり」の割合が，「概ね希望どおり」の割合を超えている系が学部では３課程，大学院では全ての専攻で超えており，希望どおりでないの割合も１～２%と低く，極めて高い割合で希望企業へ就職していることが確認できる。)』であった。

※問 07-3：2022 卒業予定者アンケート調査結果分析（就職先に関する評価）

（９）就職活動に関する評価（問７－４）

「イメージどおりだった」，「イメージしたものより容易だった」≒「積極的に(自信を持って)イメージどおりであると自己評価」として評価する。

問７－４．就職活動は，活動開始前に考えていたイメージに近いものでしたか。（イメージどおりだった　イメージしたものより容易だった　イメージしたものより困難だった）

「イメージどおりだった」及び「イメージしたものより容易だった」割合の合計の平均

	2022 年度調査			2018 年度調査		
	学部	大学院	全学	学部	大学院	全学
イメージどおりだった	45.3%	38.6%	40.3%	41.2%	40.5%	40.7%
イメージしたものより容易だった	26.6%	32.8%	31.2%	41.2%	32.4%	34.3%
イメージしたものより困難だった	28.1%	28.6%	28.5%	17.6%	27.0%	25.0%
イメージどおりだった　イメージしたものより容易だったの割合	71.9%	71.4%	71.5%	82.4%	72.9%	75.0%

【分析結果】

2022 年度の「イメージどおりだった」及び「イメージしたものより容易だった」割合の合計の平均は、学部 71.9%、大学院 71.4%、全学 71.5%であり、学部及び大学院とも同じような割合であるが、2019 年度から 2022 年度の学部の平均は、割合が低下傾向にあり、2018 年度調査と比較すると 10%程度低下している。

以下「2018 年度調査分析結果」

『学部卒業時の就職活動に対する評価は，「イメージどおりだった」，「イメージしたものより楽だった」の学部平均 82.4%，大学院平均 72.9%である。大学院は学部より 10%割合が低く，学部卒業時に比べ４系，５系で割合が低くなっている。特に，15%近く低下しており踏査する必要があるのではないかと考える。)』であった。

※問 07-4：2022 卒業予定者アンケート調査結果分析（就職活動に関する評価）

（10）就職支援に関する評価（問７－５）

問７－５．本学が実施した次の就職支援は役に立ちましたか。(役立った　どちらかというと役立った　あまり役立たなかった　役立たなかった　参加しなかった（利用しなかった))

【分析結果】

就職支援は、2018 年度 13 項目から年度毎に就職支援を拡充し、2022 年度は 18 項目に拡充している。各課程・専攻間、年度毎の変化が大きいため、大学全体における就職支援の評価は難しいが、2022 年度の「役立った」、「どちらかというと役立った」割合の合計の平均が 50%以上の項目数は、18 項目中４項目（60%以上０項目）であり、2018 年度と比較して学部は２項目、大学院は１項目増えている。全体平均についても役立ったとする割合は若干増えている。各課程・専攻については以下のとおり。

機械工学課程・専攻

2022 年度の「役立った」、「どちらかというと役立った」の 50%以上の項目数は、18 項目中７項目（60%以上１項目）であり、2018 年度と比較して３項目増えている。学部は５項目、大学院は１項目増えているが、全体平均では 2018 年度と大きく変わらない。

電気・電子情報工学課程・専攻

2022 年度の「役立った」、「どちらかというと役立った」の 50%以上の項目数は、18 項目中１項目（60%以上１項目）であり、2018 年度と比較して４項目減っている。学部は 10 項目、大学院は２項目減っている。全体平均でも 2018 年度から低下している。

情報・知能工学課程・専攻

2022 年度の「役立った」、「どちらかというと役立った」の 50%以上の項目数は、18 項目中９項目（60%以上４項目）である。2018 年度と比較して６項目増えている。学部は９項目増え、大学院は４項目増えている。役立った項目は大幅に増え、全体平均は 2018 年度から大きく増加している。

応用化学・生命工学課程・専攻

2022 年度の「役立った」、「どちらかというと役立った」の 50%以上の項目数は、18 項目中４項目（60%以上２項目）であり、2018 年度比較して３項目増えている。学部は変わらず、大学院は３項目増えている。役立った項目は増え、全体平均も 2018 年度から増加しているが、平均値は他の課程・専攻より低い。

建築・都市システム学課程・専攻

2022 年度の「役立った」、「どちらかというと役立った」の 50%以上の項目数は、18 項目中２項目（60%以上０項目）であり、2018 年度と比較して１項目増えている。学部は６項目増え、大学院は１項目減っている。役立った項目は増えているが、全体平均は 2018 年度

と大きく変わらない。

以下「2018 年度調査分析結果」
『本学が実施した就職支援は 13 項目で、「役立った」、「どちらかというと役立った」の全課程・専攻平均値における 50%以上の項目数は、13 項目中２項目である。学部及び大学院は、各２項目であった。2022 年度調査では、就職支援は 18 項目で、「役立った」、「どちらかというと役立った」の全課程・専攻平均値における 50%以上の項目数は、18 項目中４項目である。2018 年度調査と比較して、２項目増え、学部は２項目、大学院は１項目増えている。全体的には、若干割合が上昇している。各課程・専攻毎、年度毎にも増減が大きく異なるので、年度毎の推移を確認する必要がある。』であった。

※問 07-5：2022 卒業予定者アンケート調査結果分析（就職支援に関する評価）

(11) 本学に対するイメージの評価（問９－１、問９－２）

「良くなった」,「変わらない」≒「積極的に(自信を持って)良くなったと自己評価」として評価する。

問９．本学全体の評価について

問９－１．入学時と比べて本学に対するイメージは変わりましたか。（良くなった　変わらない　悪くなった　その他（　　））

「良くなった」及び「変わらない」割合の合計の平均
「悪くなった」及び「その他」割合の合計の平均

	2022 年度調査			2018 年度調査		
	学部	大学院	全学	学部	大学院	全学
良くなった	37.8%	40.4%	38.9%	31.0%	38.2%	33.8%
変わらない	57.3%	55.2%	56.3%	57.7%	50.7%	54.9%
悪くなった	4.6%	3.0%	3.9%	10.6%	10.6%	10.6%
その他	0.4%	1.5%	0.9%	0.6%	0.5%	0.6%
良くなった　変わらない	95.1%	95.6%	95.2%	88.7%	88.9%	88.7%
悪くなった　その他	5.0%	4.5%	4.8%	11.2%	11.1%	11.2%

【分析結果】
2022 年度の「良くなった」及び「変わらない」割合の合計の平均は、学部 95.1%。大学院 95.6%、全学 95.2%であり、「悪くなった」及び「その他」割合の合計の平均は、2018 年度から半減していることから、卒業・修了時までの在籍中の教育活動の実態が入学時に想定した教育活動よりも良くなっていることが確認できる。

以下「2018 年度調査分析結果」
『学部卒業時，大学院修了時いづれも，「悪くなった」の割合は，学部平均 10.6%，大学院平均 10.6%であり，割合は変わらない。ただし，５系の大学院での割合が，平均値の２倍以上である，また大学院進学修了時に悪化していることから原因を踏査する必要があるのではないかと考える。』であった。

※問 09-1：2022 卒業予定者アンケート調査結果分析（本学に対するイメージの評価）

(12) 教員，事務職員，設備，環境に関する満足度の評価（問９－３）

「満足している」,「どちらかというと満足している」≒「積極的に(自信を持って)満足していると自己評価」として評価する。

問９－３．本学での学びを振り返って，教員，事務職員，設備・環境はどうでしたか。（満足している　どちらかというと満足している　あまり満足していない　満足していない）

「満足している」及び「どちらかというと満足している」割合の合計の平均

「あまり満足していない」及び「満足していない」割合の合計の平均

	2022 年度調査			2018 年度調査		
	学部	大学院	全学	学部	大学院	全学
満足している	36.6%	42.4%	39.1%	26.1%	26.6%	26.3%
どちらかというと満足している	51.5%	44.8%	48.6%	57.1%	56.0%	56.7%
あまり満足していない	8.8%	10.8%	9.7%	13.9%	12.1%	13.2%
満足していない	3.1%	2.0%	2.6%	2.9%	5.3%	3.9%
満足している、どいらかというと満足しているの割合	88.1%	87.2%	87.7%	83.2%	82.6%	83.0%
あまり満足していない、満足していないの割合	11.9%	12.8%	12.3%	16.8%	17.4%	17.1%

【分析結果】

2022 年度の「満足している」及び「どちらかというと満足している」割合の合計の平均は、学部 88.1%、大学院 87.2%、全学 87.7%であり、2018 年度から年々割合は向上しており学部及び大学院とも 85%を超えている。

以下「2018 年度調査分析結果」

『学部卒業時，大学院修了時においても，教員，事務職員，設備・環境に対する満足度は，学部平均 83.2%，大学院平均 82.6%であり，「満足していない」，「あまり満足していない」の割合は，学部平均 16.8%，大学院平均 17.4%である。在学する期間が長くなると，満足度は低下すると考えられるが大学院においても比較的満足度は高い。学部においては１系が，大学院においては４系の満足度が特に高いことが確認できる。）であった。

※問 09-3：2022 卒業予定者アンケート調査結果分析（教員等に関する満足度の評価）

(13) 大学生活全般に関する満足度の評価（問９－４）

「満足している」，「どちらかというと満足している」≒「積極的に(自信を持って)満足していると自己評価」として評価する。

問９－４．本学での大学生活全般について，現在どのように感じていますか。(満足している　どちらかというと満足している　あまり満足していない　満足していない)

「満足している」及び「どちらかというと満足している」割合の合計の平均

「あまり満足していない」及び「満足していない」割合の合計の平均

	2022 年度調査			2018 年度調査		
	学部	大学院	全学	学部	大学院	全学
満足している	34.7%	42.9%	38.3%	27.1%	33.3%	29.6%
どちらかというと満足している	52.3%	47.3%	50.1%	56.1%	50.2%	53.8%
あまり満足していない	9.5%	8.9%	9.2%	13.2%	15.5%	14.1%
満足していない	3.4%	1.0%	2.4%	3.5%	1.0%	2.5%
満足している、どいらかというと満足しているの割合	87.0%	90.2%	88.4%	83.2%	83.5%	83.4%
あまり満足していない、満足していないの割合	12.9%	9.9%	11.6%	16.7%	16.5%	16.6%

【分析結果】

2022 年度の「満足している」及び「どちらかというと満足している」割合の合計の平均は、

学部 87%、大学院 90.2%、全学 88.4%であり、2018 年度から年々割合は向上し，各年度85%程度である。

以下「2018 年度調査分析結果」
　『学部卒業時でも，本学での大学生活全般に関する満足度は，学部平均 83.2%であり，「満足していない」割合も，学部平均 3.5%であることから満足度は高い。大学院修了時には，「満足している」割合が向上し，「満足していない」数値が低下していることから大学院修了時の満足度は，質も高くなっていることが確認できる。
　情報・知能工学専攻、建築・都市システム学専攻の「あまり満足していない」の割合が大学院修了時に，他より高くなっており経年変化を確認していく必要がある。』であった。